

911.3
サ

山
山
山
山
山

東都知是坊一瓢著

能 潜
西 孔 仙

校
有
免
麟
余
一



古形鼻月を係乃年々わきま二可以書久降
法くたを以て言孔小窗も多々地牛乃家狀
いりては居申の扉を也れふ似程あまや
流流しそつれまに年々後法物さ里風交
きくしあ美能の量何字も出さるふと一の
夏かわをれいし久厚乃さこのもさふけ
多れをあらさるしと目られ中をたさるるを

さうりていふもあつた事ありあじとて禮をいへ礼ん
以まれ世よ涼くもゆいへ多能風士たら礼
年の礼よりと五世をいへと勢も先んたり
まやあまを母を尾陽礼士朗やほつて礼の
御皇日乃本く一服を記しをより神路山のぬきと
らうあまを母の神よ三台傳と傳の浮世果の
まの禮をいへとまの次善也とふ我難波に
いふとつ里安齋播磨をいふまてともふと

ゆきとて四國一やうり筑紫一様もむき天
海隅を經て果を長崎のよりより西とせばあり
先ん届よ多架と禮を西歌仙を志り名はに
るものやまを礼首尾三十六句と三十六人の事礼
あやふとて是礼をいへは風をいへたれは礼ふ
有物を勅しとてをいへと狂言礼子らよ海内の
友をいへとて中とて或は禮被をいへと
蒲園は是礼とてと入禮互の推諷と情をいへと

ふらふらと遊ばしむるのころあつたさうなうたはた
まはたをみるやまはたの村にたむけぬを

文化丙子年 知足坊一瓢



海ありさうなうたはたの歌は
瓢

夕のしほきとてを又
出

雲はしほきとてを

雨はしほきとてを
梅間

くさきとてを
翠川

世はしほきとてを
推

戸をたたく

細もろくく雲とせき風 松巻

山の末の山 わく 句籠の膳口 可雄

永野のこゝま く 夕 製 松林

穉子を 物 出 せ らう い 所 に 尺 八 尺 長

ふきみ ま 咲 く 河 の 海 の 舟 も 消 え 哉

高き く くら い 人 を 言 ふ 心 の 言 ふ 海 の 波 も

あつ に 持 ま の ぬ け の 竿 の 文 も

今期 の 一 月 の 又 ち 松 の 上 に 甘 冷

と も ち な にか ん 西 の 海 の 心 を 雄

新 ら 名 の 海 の 心 を 松 の 上 に 甘 冷

ゆ り 乃 の 心 を 松 の 上 に 甘 冷

何れも樹の花とて世路に流るる者哉
其れも子も鳥も人も沙汰をせざる日
あはれも心もあはれも田畑も元
寺のこころも男も女も
冬も雨も神も
あはれも子も人も
あはれも心もあはれも田畑も元
寺のこころも男も女も
冬も雨も神も
あはれも子も人も

白菊は再び春に

秋ふもや秋

百朋

るるりる

いふもいれ

武陵

はくも重振板村村ありき
律道

川三石の才年るる
樽

馬の尻をむしりて

鹿の

心しき家 **閩** 各月 天坡

上人のまはりの新皇

玉しき **磯** 白く小 **鷲** 風

酒とけり **十** **七** **月** **二** **日**

はる **り** **法** **不** **寸** **八** **日** **由**

煤 **は** **り** **し** **り** **た** **ら** **ぬ** **は** **た**

あ **ら** **り** **し** **り** **た** **ら** **ぬ** **は** **た**

多量の教 **乃** **印** **を** **し** **り** **た** **ら** **ぬ** **は** **た**

かし **し** **り** **た** **ら** **ぬ** **は** **た**

蘇 **乃** **印** **を** **し** **り** **た** **ら** **ぬ** **は** **た**

曉浦 勢列人

文常 姓源过氏名用信字府留号英亭俗称平右齋門江列堅田處士

甘谷 号丹頂林亦管菰庵加列金澤人

雪雄 号梅室加列人來居于平安

魯隱 山形氏名長康号繩海子俗称用助住于浪花今橋通

長齋 姓七五三名公濟字廷美号押壺俗称作九齋門住于浪花淀屋橋南涯

鸞雲 俗称茨木屋和助住于浪花心齋橋上人町北

米彦 長谷氏号白雀園俗称米屋彦太郎住于浪花堂嶋濱三丁目

桐栖 仁木氏号五杉堂通称竹輔浪花人居于棋列兵庫

脱負 槽列人

玉屑 釋氏号栗本任播列米田神宮寺

化貝 槽列人

百明

武陵 号杜陰通俗西尾六四郎住于丹列篠山城西大山

席道 備後人

樽堂 栗田氏号息隱亦二堂庵錄列松山人遊于藝列河手洗没于時文化十一甲戌八月二十一日

鹿門 俗称松嶋屋常十郎藝列河手洗人

戈坡 竹原氏藝列河手洗人

篤老 飯田氏号篤老園俗称完藏居于藝列廣嶋

羅風 俗称油屋仁右衛門住于長門赤間關

了國 齋藤氏俗稱東四郎豊前小倉藩士

自由 大野氏名風筑前福岡藩士

凡坡 曾我氏稱養庵住于筑前波如多

四軒 田口氏俗稱儀兵衛住于筑前福岡

葵亭 姓佐藤俗稱藤屋藤方衛門住于豊後日田隈町

幽嘯 越後長岡人來居于肥前長崎

此處有數行模糊不清的書寫，可能為人名或地名，因字跡過於淡或模糊而難以辨認。

よまの病ふをらてな

せしよなくちりあるを

露れををそくつうや五月雨 成美

うつみ火を鼻てきるひとわくれ 袁下

茶はけいけや年首まかりて花盛 壽翁

里の子や正月冬はけいけいけ 老鴉

鯨れ毒くくやうなる月夜心 心非

ひら布てゑ寒葉さけい古茶中 車西

ふらぬ守れめてくくく女常し 吞貨

茶やうー松殻といふを花ふ咲 守靜

油まてを注てまゝ魚や雀は子	道彦
花よそか社にるれささうしき	百之
三つやとまゝに花をいさるりあや	一哉
人並小羽目をまゝのまゝ知布の家	周化
清らまのめさか——子世花法堂	梅隣
白雲や十日小一度掃もすれ	太民
その蟬の鳴日ささるりぬきほ木	巴濤
連立て後を流る鹿の子うれ	秋耳
白魚や五あかこあらうて流れに	對竹
その小雀を雲夜を眠く眠鏡を系	謀圃

はるれ雪散はき出して降らせを架	安屋
五月のやまのりそす家れうら	久城
橋を布てさるらるるるる流月	芝山
まゝに花葉をちとちふちつら	鈍齋
十月れ日小掃うらや漱田れ橋	岸橋
壁空のけらまこや万吹吹らふら	長閑
みしつ夜を移れ備よ掛のま	永矢
まゝ臭き雀の群よ夢れ雨	太錦
花さう架地獄れ使妙ひま	仙骨
古空のちんちんまゝを柳のさ	鬼洞

竹葉のたてしん林をのこはまこく乳芒

寒松

山を焼くうららと雪れらりみ

一阿

まほろりや牡丹の花れたの瓦片

雨籟

かえき子の草ふらよいとや南田川

孤山

おぼろりして燈ゆてもせ益の花

蕉雨

きりぎりすの焚明れ船渡り乳

行馬

夕のあやゆらりかかきき人若あ

辛心

くすくすや拍子ふらふらいとの浪

明良

きりぎりすのたけり乳きり乳

可登

松さくや山嵐ちり建る浦れ人

行妓

きりぎりすのたけり乳きり乳

詠歸

松さくや山嵐ちり建る浦れ人

詠歸

松さくや山嵐ちり建る浦れ人

詠歸

松さくや山嵐ちり建る浦れ人

詠歸

松さくや山嵐ちり建る浦れ人

詠歸

松さくや山嵐ちり建る浦れ人

詠歸

松さくや山嵐ちり建る浦れ人

詠歸

松さくや山嵐ちり建る浦れ人

詠歸

松さくや山嵐ちり建る浦れ人

詠歸

松さくや山嵐ちり建る浦れ人

詠歸

清月夜ふきくらききりし子さふ 示堂

春風や閑れ形ゆきゆき 蛙足

くまの夜まじりてき面忘る 少年 雀人

景清を寝くひけり五條坂 鬼一

流るる四角をみれば花の中 和扇

燈牛をくまきいり我いなり 徐柳

寂ふも曲てうたふりしれ内 省己

米袋おとや柳れ病めうへ 徐風

まお枯をわめくくく菜汁は 春成

まれ月とありやまてちさくある 有麟

蟹目のおろふふりや五月雨 國村

黄昏や花れしういふ待乳山 斗月

おのそや嚏のをてえいつ子心 東雀

まれ梅小膽はうしてやうの夜亭 輓甫

猫の急き宿よお身ををうくしきり 梅仁

まふ入し宿をうそくれ果子を 其杯

里を深の身をたふす子ねやうい 雅長

松風を袂ふいもらんらん色い 青涼

口わいて不二下りし喜多丸小輪 可良之
萱も色はくそきやち山 五渡
敷ともばんしうこぬる宵の空 也好

山城

夕陽ふりし赤きれ赤あをれ序 蒼乳
むく起や稲音やきれまひとち 茂良
日表をみれうみししてまのち 土卯
さく浪れ潮子あすれんるれ終 其成
明てしりさくく厚のやのまゝ形 月居

大和

おとまりすけしをさるる鳴 空阿
宿るをさるれまを踏む涼雪うぬ 拾葉

河内

ちや人の家建ふあるおとちめう形 耒耜
陽をれ真ふの月さやほれれち 宝雨
軽ひとつあはれふちうよ動きさち 花史

和泉

傘さして出れを扱よはれ目さす 喜齋
杉の戸やほをいとえねとほりま 菅笛

横津

十月此花の下を松ふ炭一駄 井眉

山風の押入はありよき炭ふら 尺艾

阿もやかのや高も浮るきはつ難 三津人

雪ふ見えそやらくそ炭あると 星譜

雪月より子あそ見えぬ牡丹丸 奇測

伊賀

鹽まろれ鏡持てみるしこれ 猪赤

雲は冬やあそるるこれ松の冬 士得

伊勢

涼きや人の平此早色もま 丘高

大草や炭抱てある相撲より 耕圃

赤の針此松のほらもやま 周終

尾張

夜通し一降名もあそ年の雪 竹有

子此戸ふ見え通す月さそりそ 少女

山の月や通してあつた鹿野の月 鹿野

植る間とはやうれは竹の蔭 東陽

祇園もやんれ心も花も 逸人

とらふらぬ妻小海老汲むみちとが 万和

赤い草や若と。降も浮世うたて 木老

十月に花の下をの松ふ炭一駄 井眉

山風の押へはありよ冬を冬ふら 尺艾

阿もゆかのや若と浮る等しはう難 三津人

雪ふよ見えそやらくそ炭あふと 星譜

晴る月のふ子あとも見えぬ牡丹う乳 奇測

伊賀

陰をうれ鏡持てみるしつれふ 猪赤

雲は冬やあつとるるれ松の冬 士得

伊勢

涼しきや人の心は 早色もま 丘高

大草や炭抱て居る相撲とり 耕圃

赤の針枕松のほしらもよ若ふ 周終

尾張

夜通し一降をさうとり年の暮 竹有

茅枕戸ふ見道守月とちうりき 少女

山の月を運んで来た花店の方 鹿野

植る間とはやうなれし竹の蔭 東陽

祇園をやんれ心も花も 逸人

廿五日あるを名ありして庵の花籠
死跡る人れ多きよ益れ有
杜堂
岳轆

三河

月れ出てうえるや海の鳴る所
卓池

山口や林を志る魚れ栗る所の
岱呂

多る筆の柳けり直すうす
謀老

夢豆や二日多禁よ京くぬ
秋舉

遠江

了りたまきくをくしきよ持てるは
木甫

梅さぬし何をさるるよき菜庵下
露岳

嘆く花を高向ふこくや網の鱗
三枝

雞店やまゆ移て出る二日丸
露喬

駿河

夕丘や伊家礼合飲のさわり守るき
畫牛

花をさる移るわよゆき二日
石雅

甲斐

麓出の柳澄るる月を氷見
可都里

春雨やそ音れ宿を海松海雲
有斐

梅柳揺らきぬ冬何まよふ
漫々

尼寺れりわらりる蓮れ花
重行

控らまゝの母よ遠く夜や暮れは
百二

のさしし子鞋賣とや柳多く
一作

聲のせむきつ乳を母よ林の月
真恒

暮れ夜の流ゆるや暮きおれ月
草丸

流るの流ゆるおれ母よわかまの
大馬

掛てある大も刀やうよはる
草鳥

流るを流ゆるころれ巨燵の乳
嵐外

伊豆

涼も臺月阿のかつを万々らる
雪鬘

相模

控らまゝの母よ遠く夜や暮れは
葛三

浦北山ゆゑるを林のうらる
玉珂

心暮うのゆふもくら見せうそ榮れ花
澧水

みの出さ何そふうつ花のなる
洞く

月をえるくらみよ母のや暮れは
うらほ

るきと流るるうらや暮の電
雉啄

安房

暮れ夜の流ゆるや暮きおれ月
杉長

ゆらぎも待るれあつて暮れは
其文

美しく若き流るるうらるる
郁賀

上總

清くさるるしよむかむら

三化

おとれ宮の空除袂さるるや

里丸

象河や草れくねと待たの甘し

白老

下總

ふとびて染つて思ふを喜田の

金堤

苗代よ玉のやうなる月夜に那

崔老

とらふあふ益れくぬやう浪拾遺

雨塘

竹の月とや能事の来るころり

尾 煮月

新屋を危ひまよりのちあふる

北尼

加茂川あはれくさるるや心を、素地

やがさるる何とあふけり鹿の息

青洒

羊のうす人れうらやまりくす

維平

たねよる相織れ玉どうめの花

蒼岬

あまをりてさふさるる日る響け声

青岱

深さるる皆戸うらしくれ来るうて

李峰

花さるる世まはらは漂ふとあ

此蘭

ゆの志るるやよきおふり月

明齋

抱ふる正内さるる後孫

茶彦

常陸

いさよはらふよふしるもくしる二日月 李尺

葛れ花のうららかなるもぬ猫の志 柳磨

花の子腹軽くほたるをまきしうぶ 杜年

松ほもさしつとけむも花 祇鳴

春うれし葉多撫ても字あそむ 松江

近江

このうらやむもえんもうの花守と律 申齋

月影の志みむむ花れもいらぬ 千影

花の下人をいせむも撫らむは 宇洋

雲よ花をくはしほもや三袋花砂 班車

温泉のほとけれあふもりの田ありぬ 鳥頂

あらしもや吹雪れ中をまきあふ 志宇

ゆきも花のちかしと青守もき 士明

名月のもよめれもるもるうぶ 于當

美濃

様なきのしをよ禰の自れうぬ 千阿

見所のなきもあもあしは枯尾花 草入

飛彈

吟蛙人れもるもあふくして 儲史

二度と度ありの出もそ鉢もき 乙磨

信濃

寝て起て手相をうしやる秋 素葉

休まする馬北面す葉のて里 武日

我身のみをんた掃きけつ雪 若入

涅槃像鉢見ておほく哀の何れ 一茶

上野

雪のれこ急つきのせる 鱗の那 蘿月

人傳りのりこ此山やはる此月 柏翁

落栗やうんたれ時のいさこ 阿字

雨ふしおし知りや鱗のと葉 確全

菴子よほしりせんらんもく、鹿右

下野

むすひ火や山根をさるあれき 魚とき

袖の帯やびらうきそものぬ 北伏

いつのよにうつもさるしそ女島茶 雄尾

陸奥

この雪よりうらなやされて咲くや梅 平角

から鞋を本さるしそものぬ 冥く

夕の影を赤きそものぬ 素郷

梅物世を木うしりて見ゆる之 雄淵

藤の門の柳澄りてしきとの色
與人

朝のてうれに祀壇を治るる祭
杖夫

あぢきまへ伸上るる月
海浜

便ふる月やと青れは是は律
布席

あつてあつてあつてあつてあつて
し二

出羽

世を捨ててあつてあつてあつてあつて
野松

まじ出てあつてあつてあつてあつて
五瓢

あつてあつてあつてあつてあつて
豆菓

六月をなめてあつてあつてあつて
巳陵

若狭

あつてあつてあつてあつてあつて
春哉

あつてあつてあつてあつてあつて
蟻行

越前

あつてあつてあつてあつてあつて
白鱈

あつてあつてあつてあつてあつて
振々

加賀

寒をたれし可れもはたかたのりたり	日人
こまきもまきれ青きやまは鷹串	雨考
涼きれ見こてありのや磯の人	沾播
藤の門の柳澄りてまきとめを	與人
静んてうれ花畑をほろろと	杖夫
あまきまを伸上るまきりまは月	海法
何れも守りやまき青れはまき律	布席
あまきまをほろろとまきりまは月	し二
出羽	
まきを捨る人まきまのれまきまき	野松

まきを出てまきまをほろろと	五瓢
まきまをほろろとまきりまは月	豆莫
まきまをほろろとまきりまは月	巴陵
若狭	
まきまをほろろとまきりまは月	春哉
まきまをほろろとまきりまは月	蟻行
越前	
まきまをほろろとまきりまは月	白鱗
まきまをほろろとまきりまは月	振
加賀	

能登

吾れ日と夜とくちりて呼ぶ

晩籟

紙中

江戸のさくら大隈の山

乾丈

何れもけれなれり方と杜若

惠白

母よりやふゆゑのさるる乳

白年

湯池の程をいぬるのさるる

閩蘿

数入れ煙よりぬるる

虚白

音聲をこゝろにきけり

煮撲

越後

くすねてそるる

石海

海を渡るの斗り

史千

如月や人の色

麓永

雪のふ華より

竹里

更科の月や

年眉

伏渡

あつらひの吹を

文雄

うね花のト掃はらきおふさり
眉山
待ひてく被せしきし命うれ
音入
をみちてし多のたれはんつら
鹿古

能登

吾れ日とあうまくちあてつら
晩籟

紙中

江戸のさらら大瀬さらあし
乾丈

何のさけれなれうりたれ杜あ
愚白

母ふまうりぬるるまえんれ
白年

湯池の裡をうぬりやま守
関蘿

数入れ煙よりぬるまひとれ
虚白
春はるこふ是れころの奥山
素撲

越後

くすおんてききぬるこしはし
石海

海を賣の汁もこふやのり
史千

ぬかや人も色くまじる赤者
荒永

雪ふ草らうてらん手六十
竹里

更科の月や子あうらら
年眉

依渡

あうら
の吹そく色さう不破の園
文雄

ふらふらと此斬うくまて 冷みみり

淇竹

丹波

さみふれ入中よみゆ道行の音

白路

まのいへばや枝の目も木槿ちる

滄洲

丹後

親とまれば申は日永き 花とる如

蕪良

とるのそとを降るののそとをまわ

万籟

但馬

まの鞋の目よ道にまはれしは

菊菴

このおふらふらばや花のよう 盤山

尚古

因幡

好ゆてまうふしう ちれり

李諫

けりつし人のそとひて 陽春

雷師

柏耆

むしひやうらとそあてあるる節

豊明

琴弾て入れけりやうの音

沾空

出雲

陽光よ流て出 ちれ菜汁の

冬曠

遠けしは蚤をいかり ちれ草

花叔

石見

新れ出てそと砂る。のほそく乳
露月

播磨

藤くさるや木の葉に雲をまきあて
木海

透通る海に度々やうまに尾花
田實

美作

正月高麗さくさくさくさく
亀年

春のゆれはものよきしなぬ情
月磨

備前

さくら梅のちるや余寒の是は
素江

備中

美出れ果をほみ砂子も花は木
雨齋

備後

志をり尹のちるはさくさく
喜林

安藝

咲万々夕鳥の名もさくさく
玄蛙

花あてをさるる昔れさくさく
竹葉

周防

美竹よあをほよくさるさく
一葉

口癖の是れい中さくさくさく
馬末

出を極して暑きあつてもひもわら 青海

淡路

暑れ吹きまじり 松林下をゆく 鳥秋

くるの夜のまを思ふよもあきなり 青城

阿波

夕べのすきやちをれ淡路島 葦伯

あつらひわらもききぬど何事 土芳

讃岐

梅のついで皆戸の通りや峯 南之

あつらひわらもききぬど何事 梅堂

伊豫

暑けり巨魁を歩つり 福井 石舟

海山を動して枯る 困るうれ 吳天

土佐

灌仏やうと一里人嘆そめて 瀬江

唐土ののちより 二百をくせ候 松青

筑前

湯芽けり小庵うらなふ 清き 五朗

なまやちぬ故ちをきれ 涙をうらん 康哉

筑後

富士の麓にちるさきし 桑をさす 文南

豊前

去れり美山里也 猿田去 北溟

さかたけのや佐登のうらな流し 木父

岸の石亭 石亭

豊後

山伏の宿を 難波のふらふら 月代

垣子 ぞうちるうしひは 菊也

肥前

結尾花のうらな 菊也

炉火の 下目きき 指の 祥未

是れ花をさすの 祥未

肥後

真実の 祥未

猿田の 祥未

日向

さかたけの 真彦

薩摩

さかたけの 青梁

さかたけの 琴測

壹岐

川原にさくらさくらや花はゆき

三十種

對馬

影さくら影のやすさや花は月 戯蝶

去年にやや物見塚へ猿登せし

信濃の一葉もたぬきけ夜後といふ

雪のひびきひびきの神ははなはなふ 一茶

ちまひのまみちぬきけさうりふ 一瓢

大子鞋小子鞋足ふくら海見て

一番ふねふさふさのふらふら 一茶

あつこいもそまき名月花をよむ

草暗くふらふらと法代を長原の 瓢

竹岸煙さうさうとけちあやて

さくら花の茶のはなはなはなつち 茶

あまの木の将可く日をさうりや 瓢

子をとりてまきくさくさく茶入 茶

あまのこいほろこいゆる黄檗さ 瓢

ちまひのまみちとさうさうる山は圓 茶

暮年と天下の茶のつらさうらて 瓢

三百の店をわら月夜うら 茶

うそ寒の腰を帯お集茶瓶くん

まともや湯成とくまきる小較

花の跡こぼれゆく一隅田川

煮てはふるもまいの其角の

下略

瓶白れたいそをさる寒いやら

二軒もやいよ咲る少葉花

うんとも層こころをさる川堀下

ほろりおひの酒五百石

隆達とくよ万々

おろり湯屋れは若き礼

おろりおれ吉野の里一歩

子おろし子を目うらうら

ゆるりのくは花や流す人

う月日を刺らるる日を

を植い杉よをまわしおをさす

膳所の生例の名後ひをい

ちるをそりのを多拭よたあけて

あつ人もるや妹のよを敷

うすきうのまきあれ有る小

瓶

茶

瓶

茶

瓶

茶

瓶

茶

瓶

茶

瓶

茶

瓶

茶

瓶

茶

花のたもとれよーや焦して

瓢 茶 瓢

もろあまより足利流も任ちりて
有呂利といつてめてこころ

下略

草庵四時

わさたのむいもいろくら柳う乳

蟻も出ておしるー振やうしる

むーの芽のまほりさるれや破れ

胡麻三粒をねても娘ーまの節

待宵辭

撫中居

そよ待宵といふとほきれ時いろのこり

よや呼そめまむかの侍様と名も侍やまをきて

冬狩のうへみまをたふんれをらうやとるまの

まをうてれより侍うとまやふまをまを

まをまをののまをしてはやのるれやる

あまをまを或を棋圍結れふまをたふんれ

あまをまをまのまをまの路とまをまを

まをまをまをまをまをまをまを

まをまをまをまをまをまをまを

ついでまのよは夜燈の洞を思ひ種花一日乃
葉を新まりて親のいさめ入るそくしを
はくめぬれはさうらひのさかすか月を余まは
待音を花ともしもあふよのちかひとらんれと
廬山よりふき行林よ志のひつるとら長今の
世よ編屈ともしに意地ともしもすか身は
こまらうくくあさ志らうの描と邯鄲の枕と
おきとあつとす後や月日を百代たはさふ
しつらあふあふあふあふあふあふあふあふあ
を雪のいさよひつひつあふあふあふあふあふあ

ふこり去年の秋を病房の夜寒よ抄らて
は世の猿夜とあふとくしつ子を隔てし
その光ををとふ灯のあつとあふいれつはとさ
呉越のわしひん思後よあつとつてとらふあふ
色あふあふあふあふあふあふあふあふあふあ
あをわとこしと常とあふあふあふあふあふあ
堀らとて供のゆいといはつとあふあふ天津園と
と名はあふあふあふあふあふあふあふあふあ
益を擧げしと南弟とあふあふあふあふあふあ
乃三五等たあふあふあふあふあふあふあふあ

たまじうれをそ曾た、そふら、そ絶、狂のた、あ
つ、や、き、ひ、と、わ、わ、ひ、さ、し、よ、わ、れ、れ、れ、れ、れ
そ、の、と、さ、あ、一、日、さ、る、二、の、う、ら、う、よ、れ、れ、れ、れ、れ
い、ま、の、餘、映、の、溜、の、と、ま、い、し、か、を、床、の、
階、下、より、出、の、お、ま、ひ、の、ほ、も、と、ほ、く、あ、ら、あ
ま、同、れ、入、は、お、敷、を、ひ、し、た、て、ほ、の、臺、の、
ま、は、ら、る、ふ、お、光、り、と、ま、ま、な、その、ま、と、ま、あ、ひ、れ、
ら、ら、證、人、ま、あ、ん、し、し、その、あ、よ、持、は、れ、ら、あ、ま、
世、れ、る、の、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
葛、飾、と、灌、公、り、は、は、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

名、を、た、く、て、は、え、れ、と、ま、ら、ま、の、あ、ら、ま、し、は、
ま、結、の、面、敷、を、る、あ、ら、た、く、お、持、お、れ、地、を、
う、た、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、
袖、を、す、ら、う、て、ま、見、め、市、川、の、國、を、出、張、け、う、の、
さ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、
あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、
入、る、月、の、お、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、
欄、干、よ、葡、萄、も、ま、は、眼、下、の、渺、忙、と、さ、あ、の、
清、光、よ、白、日、を、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、
う、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

おのつゝゆひきりたるに
 三圍をそとらうと見え侍乳山れまのし種面
 むむ小橋場の渡し、夜をやゆきしん松
 晴の田よる上戸の晴、小ゆるえ夜張坂のさつり
 を曉んと侵して下藤の鼻をよらとけしむ
 湯芽うあちうしあさつ八町北山有は屠所の
 此は、孔あゆみちるうも根峯坂のまは本
 立よまのてまてしうさのあを三たあう
 引くわさく出て筑波を尻小にそる得息とあら
 音小増し、唇をわ、響きあて光琳の墨をそる

待りりの字を列を看破りしは此の事なり
其味も西上人を前番入し付たるは後れ
崩れも何れかの事し違ふ人やありしは
亦聞れりやも力のうへに物と見ゆらば
う賊と見ゆらば破る事あり

有隣りしこれ一事を眼下の事として
師の今日たはつたれとて事を物と見ゆらば
此の事ありとて再事の終極ありしは
此の事ありとて再事の終極ありしは

あつたるは眼の中より物と見ゆらば
此の事ありとて再事の終極ありしは
あつたるは眼の中より物と見ゆらば
此の事ありとて再事の終極ありしは
あつたるは眼の中より物と見ゆらば
此の事ありとて再事の終極ありしは
あつたるは眼の中より物と見ゆらば
此の事ありとて再事の終極ありしは
あつたるは眼の中より物と見ゆらば
此の事ありとて再事の終極ありしは
あつたるは眼の中より物と見ゆらば
此の事ありとて再事の終極ありしは

Handwritten text at the bottom of the page, partially obscured by a tear.

Handwritten text line.

Handwritten text line.

Handwritten text line.

Handwritten text line.

Handwritten text line.

Handwritten text line.

Handwritten text at the top of the page.

